

根本 隆洋

慶應義塾大学 医学部 精神神経科学教室 助教

精神障害者のサクセスフル・エイジングに関する日米比較研究

精神科領域において、欧米では 30 年以上も前から脱施設化の動きが活発であるのに対し、日本では入院中心型の医療が長く続いてきたが、ようやく自立を促す動きが活発化し、「受け入れ条件が整えば退院可能な約 7 万人の精神障害者」の退院、社会復帰が求められている。うち約 5 万人が長期入院患者であり、既に中高年に達した慢性統合失調症を中心とする多くの精神疾患患者が退院し、地域社会での生活を開始するようになると予測されており、日本における精神障害者の脱施設化には、同時に中高年者の地域生活復帰という問題が内在している。精神障害者が地域社会の中でいかに生きがいを持ち満足な人生を送るかという、サクセスフル・エイジングについての検討が不可欠である。

わが国の先駆的な脱施設化の試みである「ささがわプロジェクト」における 50 歳以上の統合失調症患者 77 名を対象に、年齢、精神症状、認知機能、社会機能、薬物療法と QOL、向老意識、老後への準備行動との関連から、サクセスフル・エイジングの検討を行った。

結果は、健常者と比べ向老意識は肯定的で、準備行動では家族・経済面の行動が乏しかった。認知機能、社会機能と QOL、QOL と向老意識、準備行動の間に有意な相関が認められた。認知機能や社会機能への働きかけによる QOL の改善を介した幅広い支援が有用であると考えられた。

また、米国を中心とする海外の精神障害者に対するサクセスフル・エイジング研究の動向、知見を調査し、UCLA で開発された認知機能評価尺度 (CAI) の日本語版を作成した。

精神障害者の加齢に関する研究は、その重要性にもかかわらず世界的にも近年ようやく増えつつある状況にある。精神障害者がいかにサクセスフル・エイジングを達成できるかは、精神医療保健福祉における究極の課題と目標であるといえ、当領域の研究およびその知見に基づく支援方法の開発が早急に望まれる。